

第65回宮崎県学校体育研究発表大会

中 学 校 部 会

1 研究主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを
実現するとともに、継続するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習
～児童生徒一人一人の思考力、判断力、表現力等を養う授業の創造と展開～

2 日 程

9:00		9:35		10:30		11:30		13:40		14:40		15:40		16:05			
8:45		9:10		9:25		10:20		11:20		12:30		14:30		15:30		15:55	
受 付	開 会 行 事	説 明 概 要		公 小 開 学 授 校 業		公 中 開 学 授 校 業		講 演 ・ 解 説	昼 食 ・ 休 憩 ・ 移 動	公 特 開 別 授 支 業 援		公 高 開 等 授 学 業 校		指 つ 導 な 助 が 言 り (全 体)		閉 会 行 事	
	(10分)	(15分)		(45分)		(50分)		(60分)	(70分)	(50分)		(50分)		(15分)		(10分)	
会場：小林市市民体育館										会場：県立小林高等学校							

3 公開授業

種 別	学 年	単 元	発 表 者
中 学 校	第2学年	球 技 (ネット型：バレーボール)	小 林 市 立 西 小 林 中 学 校 教 諭 信 時 大 輝

4 授業研究会（今回は日程内に計画できなかったため、公開授業後に参加者を限定して実施）

部 会	役 職	氏 名	
中 学 校	指導助言者	宮 崎 大 学 教 育 学 部	教 授 日高 正博
		県教育庁スポーツ振興課	指導主事 外薮 武志
	進 行	宮 崎 市 立 宮 崎 西 中 学 校	教 諭 上妻 憲祐
	記録者	五ヶ瀬町立五ヶ瀬中学校	教 諭 森山 三幹男
		延岡市立北川中学校	教 諭 原田 卓弥

中学校部会視点説明①

研究の方向性及び研究内容

～児童生徒一人一人の
思考力、判断力、表現力等
を養う授業の創造と展開～

(1)指導と評価の一体化

(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

(3)共生の視点に立った指導内容の充実

中学校部会における研究の方向性及び研究内容については、宮崎県学校体育研究発表大会に準じる形で同様に設定した。

(1) 系統性を踏まえた指導内容の一層の充実、指導と評価の一体化 2年間を見通した指導事項配置図の作成

指導事項配置図(中学1年生～2年生)

《中1～中2・中3～高1》

- 学習状況の明確化
- 系統性のある指導が可能
- 未履修の防止/重複の削減
- 他単元に配置した場合の「見える化」

(1)系統性を踏まえた指導内容の一層の充実、指導と評価の一体化については、2年間を見通した指導事項配置図の作成に取り組んだ。これを作成することにより、記載した成果に加え、複数人で指導に当たる学校や、年度が替わって体育科教員が替わった場合にも未履修を防止し、系統性のある指導が行える。

(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり デジタル学習カードの活用

ポートフォリオの役目
視聴覚教材の活用
系統性のある
ハイブリット式学習カード

Gakken『中学体育実技』

(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりについては、本地区では令和4年度から3年間掛けて、デジタル学習カードの作成と活用を進めてきた。デジタル学習カードは、従来のポートフォリオとしての役目に加え、視聴覚教材を上手く融合させる形で、より系統性のあるハイブリット式学習カードとなった。

(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり デジタル学習カードの活用

③-3時間目『トスしやすいサーブ練習の方法を考えよう。』

学習内容 ①パス練習 ②サーブ練習⇒レシーブ練習 ③ゲーム
フローターサーブ ⇒ 得点を狙ったりするサーブ

ポイント①
ネットに対して「」に構える。

球技 バレーボール

フローターサーブ

ポイント②
1歩踏み出すと同時にスイング開始。 少しずつ距離を伸ばしていこう。

Gakken『中学体育実技』

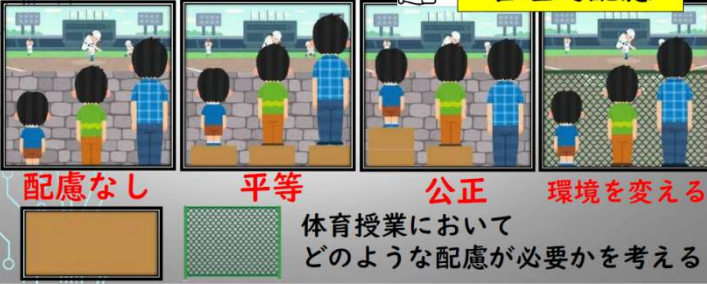
今回のデジタル学習カードを作成するに当たり、より綿密で計画性のある単元計画が必要となったため、(1)で作成した2年間を見通した指導事項配置図を具現化する形でデジタル学習カードが完成した。

中学校部会視点説明②

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

それぞれの障がいや特性、困りごとに合わせて行われる配慮

合理的配慮



(3)共生の視点に立った指導内容の充実については、本地区中体連では、“共生”の言葉の意味やそもそもなぜ現在“共生の視点”が求められているのか。についてその背景を理解することから始めた。

それぞれの障がいや特性、困りごとに合わせて行われる配慮のことを“合理的配慮”と言うが、これらのイラストが示すように、その人に合った支援を行うことや、そもそもの障がいとなり得る環境を変えることが大切であると再認識できた。

事業者による「合理的配慮の提供」が義務化

障害者差別解消法が改正され2024年4月から施行

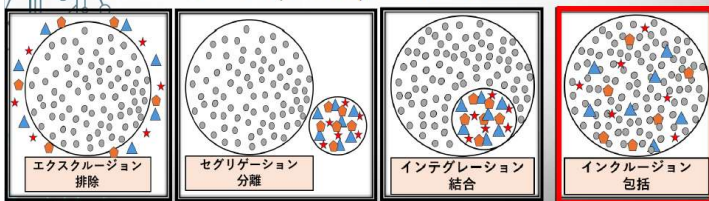


教育現場に限らず一般社会においても
バリアを取り除くことが求められている。

これらの“合理的配慮”は教育現場に限らず、一般社会においても「合理的配慮の提供」が義務化されており、障がいとなり得るバリアを取り除いていくことが求められている。

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

インクルーシブ(包括)教育の概念



個々の異なる属性が受け入れられ
互いに尊重されている状態

文部科学省が報告している「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育の構築」にもあるように、インクルーシブ教育とは、4 段階あるうちの最終目標段階であり、個々の異なる属性が受け入れられ、互いに尊重されている状態のことを示している。これらをもとに、我々が目指すべき、保健体育科授業のゴールイメージが共有できた。

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

アダプテッド(Adapted)シートの作成と活用

多様性(Diversity)を認めつつ包括(Inclusion)していく方法



これまでの背景をもとに、Diversity(多様性)を認めつつ、Inclusion(包括)させていく方法として、適合と訳される“Adapted スポーツ”から言葉を引用し、本地区オリジナルのアダプテッドシートを作成することとした。

中学校部会視点説明③

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

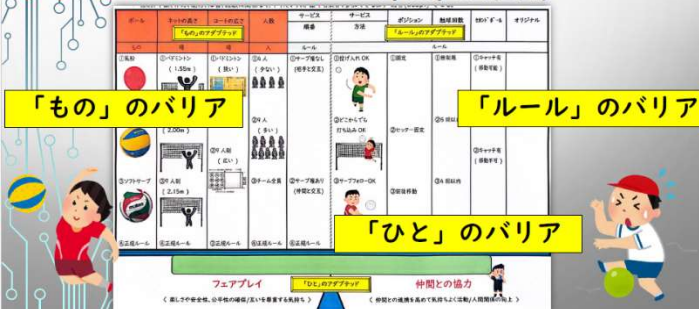
多様性を認めつつ包括していく方法⇒アダプテッド(合理的配慮の一部)



アダプテッドシートを作成するに当たり、体育授業の中で求められる子どもの資質・能力と照らし合わせながら、“順序性”に着目した。そこで見えてきたものとして“他者肯定感”や“フェアプレイ”といった態度に関するものは「学びに向かう力、人間性等」、 “多様性の理解”に関する知識の部分においては「知識」、今回用いた“アダプテッド(適合)”のスキルについては、「思考力、判断力、表現力等」にそれぞれ分類でき、態度⇒知識⇒スキルの順に生徒へ落とし込んでいく重要性を感じた。

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

アダプテッドシートの作成と活用



完成したアダプテッドシートである。バレーボール学習におけるルールの工夫一覧を“ひと” “もの” “ルール”に分類し、選択できる構造になっている。特に、バレーボールはチーム競技であることから“ひと”に関するバリアを取り除くことが全ての基盤として成り立っていることが見える形で作成した。また、他の单元でも同様のシートを作成し、アダプテッドシートから“アダプテッドブック”へと昇華させていきたいと考えている。

授業参観の視点①

(1) 指導と評価の一体化

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

指導事項配置図をもとに作成したデジタル学習カードを効率的・効果的に活用できていたか。

【 授業参観の視点① 】

指導事項配置図をもとに作成したデジタル学習カードを効率的・効果的に活用できていたか。

授業参観の視点②

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

アダプテッドシートの活用により男女差や技能差を超えて楽しくゲームが行えていたか。

【 授業参観の視点② 】

アダプテッドシートの活用により男女差や技能差を超えて楽しくゲームが行えていたか。

ア 事前研究会からの変化

- 事前研究会(4/11)と実際の授業(6/11)では、学習内容が異なるため、事前研究会で出された質問や意見等の中から、単元全体を通して変化を加えられる部分に焦点を当てて明記している。

Q1. 今後、トス(第2触球者)はどのように変わっていくのか。

- ・ キャッチしたボールを頭上に投げ上げてからトスを出すように変更した。
- ・ 攻防が間延びしないようにキャッチしてから3秒以内にアタックに繋げるルールを追加した。

Q2. 競争性を求めるのであれば、点数を付けてもよいのではないか。

- ・ 競争性を失わないように指導は行うが、点数板を出すことのデメリットとして、「点数」ばかりに目が向いてしまうため、共生の考えを学ぶ今回の学習活動には必要ないと判断して置いていない。実際の授業では、自チームの実態に応じた“ルールの考案”が学習活動となるが、点数板を配置することにより、プレー内容ではなく、点数の増減(例:3段攻撃が成功したら3点)に思考が移る可能性を危惧している。つまり、点数といった“量”的な部分によるルールの変更ではなく、プレーの中身といった“質”的な要素を思考させるための方策として、「敢えて点数板を設置しない」との結論に至った。

Q3. 生徒は“アダプテッド”という言葉进行学习しているのか。

- ・ 前時の学習で、体育理論2章①『運動やスポーツの効果』を組み込み、既習している。体育理論において“アダプテッド”に関する基礎知識も抑え、体育授業において実践を行う流れにより、より深い学びへと繋がりたいと考えている。
- ・ 単元全体を保健・体育理論とも組み合わせることで、体育理論で時間を掛けて深く思考した独自のルールを、体育分野では必要最小限の説明のもと活動に入れるといった利点があり、カリキュラムマネジメントの面からも非常に有効な方法であった。

Q4. 活動時間が短い印象を受けた。

- ・ 事前研究会の学習内容では、“学びに向かう力、人間性等”に関する指導内容であったため、“アダプテッドシート”の説明や、共生に関する知識の再確認が必要となり、活動時間の確保が十分ではなかった。実際の授業(6時間目)では、事前授業(4時間目)の反省をもとにした活動が中心となり、説明を短縮し、十分な活動時間が確保できると考えている。

Q5. 今回の“ルールの工夫”は、高校3年生で取り扱う内容のような印象を受けた。

- ・ 高校3年生はもちろんのこと、全ての発達の段階をも網羅できるようなアダプテッドシートの作成に取り組んできた。アダプテッドシートをベースに、各学校の児童・生徒の実態に応じて選択できるという意味では、全ての校種において活用できると考えている。当然のことながら、高校3年生になるにつれて、正規ルールに近づいていくものであり、最終発達段階以前でも活用がなされることで、どの発達の段階においても技能差や性差を超えて楽しくゲームが展開できることを期待している。

イ 視点に対する最終的な成果

(1) 系統性を踏まえた指導内容の一層の充実、指導と評価の一体化

- 単元計画構造図を作成するにあたり、指導事項配置図を参考にすることで、未履修の防止、年度をまたいても系統性のある計画作りが容易に行えるようになった。
- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の指導事項を偏りなく配置することで、見通しをもった評価が行えるようになった。
- バレーボール(体育分野)における単元計画に、体育理論を組み込むことで、より効率的で効果的な系統性のある指導が可能となった。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

- デジタル学習カードになることで、自分のペースで動画を視聴し、何度も基本技能の確認を行うことができた。反復的に視覚的情報を確認できるので、苦手な生徒も主体的に技能習得に取り組むことができた。
- 毎時間タブレットを活用していくことで、紙媒体のプリントに記述していた時よりも短い時間で自分の考えを記述することができ、結果的に運動時間の確保に繋がった。
- 動画や写真の処理方法を身に付けることで、個人の技能を文章ではなく、視覚的情報として残していくことができる。見本動画との比較だけでなく、以前の映像との個人内比較を行えることで、変化や成長を実感でき、意欲向上に繋がった。
- アナログ方式(模造紙)で話し合った内容を写真に撮り、学習カードに張り付けることで、まとめの時間が短縮され、アナログとデジタルの良さをそれぞれ発揮することができる。

(3) 共生の視点に立った指導内容の充実

- “アダプテッドシート”を活用することで、自チームの課題に応じたルール設定を容易に行うことができた。
- “ひと”のアダプテッドが土台となっていることが分かりやすい図となっており、チーム内の声掛けや仲間を助ける行動を自発的に行う姿が見られた。
- グリーンカードを単元全体を通して活用したことで、フェアプレイに対する意識が高まり、“ひと”に関するアダプテッドへとスムーズに繋げることができた。

☆ アダプテッドシート

⇒ 性別、年齢、体力、能力、障害、経験に関係なく、やりたい人が誰でも楽しく参加できるように“適合(adapt)”させる。

■ 活用した資料《 アダプテッドシート 》

ボール	ネットの高さ	コート/の広さ	人数	サービス 順番	サービス 方法	触球回数	セカンドボール	オリジナル
「もの」のアダプテッド								
ルール								
①風船	①バドミントン (1.55m)	①バドミントン (狭い)	①4人 (少ない)	①サーブ権なし (相手と交互)	①投げ入れOK 	①無制限	①キャッチ有 (移動可能)	
②ソフトバレー	②支柱最低 (2.00m)	②9人制 (広い)	②9人 (多い)	②サーブ権あり (仲間と交互)	②どこからでも 打ち込みOK 	②5回以内	②キャッチ有 (移動不可)	
③ソフトサーブ	③9人制 (2.15m)	③9人制 (広い)	③チーム全員		③サーブフォローOK 	③4回以内		
④正規ルール	④正規ルール	③正規ルール	④正規ルール	④正規ルール	④正規ルール	④正規ルール	③正規ルール	

フェアプレイ

仲間との協力

＜ 楽しさや安全性、公平性の確保/互いを尊重する気持ち ＞

＜ 仲間との連携を高めて気持ちよく活動/人間関係の向上 ＞



バレーボール
～学習力～
西小林中学校
【2】年【 】組【 】番
氏名【 】

Gakken『中学体育実技』

■ 授業の様子



①全体説明



②ゲームの様子



③デジタル学習カードの活用



④アダプテッドシートの活用

バレーボール 6時間目

本時のめあて 仲間と共に ゲームを楽しむためのルールを考えよう。

(1) バレーボールの魅力

(2) アダプテッドシート

(3) ルールの設定

(4) ゲーム①

(5) ルールの設定

(6) ゲーム②

(7) チームで話し合い

(8) 振り返り・まとめ

技能

アンダーハンドサービス	アンダーハンドパス	片手アタック
フロッターサービス	オーバーハンドパス	ブッシュ(フェイント)
サイドハンドサービス		

① 全員が楽しめる 競争

☆ アダプテッドシート

ゲーム	ルール	人数	時間	場所	道具	準備時間	進行時間	終了時間	評価
1. バレーボール	通常のバレーボール	10人	10分	体育館	バレーボール	5分	5分	10分	高
2. フロッター	フロッターゲーム	10人	10分	体育館	フロッター	5分	5分	10分	中
3. サイドハンド	サイドハンドゲーム	10人	10分	体育館	サイドハンド	5分	5分	10分	低

フュアプレイ 仲間との協力

グリーンカード

指宿	川添	税所
A 泊	橋谷	福岡
B 入佐	小糸	坂元
下沖	中国	吉川
C 吉田	久保	廣泉
下別府	八重尾	大久保

⑤ホワイトボードへの板書

令和6年度 第65回宮崎県学校体育研究発表大会

全体会 中学校部会授業研究会の記録

I 授業者振り返り 【 小林市立西小林中学校 信時 大輝 教諭 】

- ゲーム①に向けて、“ひと”のアダプテッドについて思考させゲームを行ったが、大勢の参観者がおり緊張が見られ、普段は見られないようなミスや連係ミスがあった。
- ゲーム②に向けて、“楽しさ”“競争性”の2つのポイントを抑え、オリジナルルールの考案を提案したことで、ゲーム①以上の接戦となることを本授業の見どころの1つと考えていた。その中で劇的な変化が見えたのがピンクチームであった。オリジナルルールを取り入れたことで、声掛けが増え、チームの活力が高まり成果を感じた。
- 授業の振り返りにおいて、他チームのオリジナルルールを見て、「自分たちも次の授業で参考にしたい」という記述があった。
- 本時のねらいの1つである「思考したことを伝える」は、多くの生徒が達成することができていた。

2 質疑応答

Q1. オリジナルルールは、どのようなものが出てきて欲しかったのか。

A1. ラリーが続かない場面が多くあったので、ラリーを生み出すための工夫が出てきてくれると良かった。また、キャッチができるのをセカンドボールに限定することなく、“1ラリー1キャッチ”のような弾力的なルールに変更していくものを想定していた。

Q2. 今回の授業で用いた「ネットの高さ2m」は、どのように決めたのか。

A2. バレーボールの競技特性上、“場の設定”については、統一する必要があったため、練習の過程を鑑み、教師側が設定した。ラリーを続けることに特化するのであれば、ネットを高くすることで、ふんわりとしたボールが増え、ラリーが続くというメリットがある。一方で、ネットを低く設定することでアタックが打ちやすいというメリットもある。どちらのメリットも得られるよう、今回のネットの高さに至った。

Q3. 今後の計画として、ルールを全チーム揃えることをしていくのか。

A3. 事前授業(4時間目)はルール設定の際に正規のルールを選ぶチームが多かった。しかし、正規のルールでプレーするとラリーがなかなか続かない状況が生まれた。そこから生徒たちがルールを緩和するようになり、「ラリーを続けたいからこのルール設定にする」「攻防をもっと楽しみたいからこのルール設定にする」というような状況が見られ始めた。最終的には、正規ルールのもと揃ったルールで攻防できることが理想ではあるが、生徒の状況と技能の習得状況を見て判断していきたい。

Q4. 授業者が考える単元のまとめ(ゴールイメージ)を教えて欲しい。

A4. 苦手な生徒もルールの工夫によってボールに触れる機会が出てきたのは学習の成果である一方で、正規のルールからは逆行する形にもなっている。今後は、正規ルールの中でチームに応じた役割分担をすることで、苦手な生徒もゲームに関わっていけるようにしていきたい。

3 指導講評

(1) 宮崎大学教育学部 日高 正博 教授

- 事前研究会からの改善が見られ、非常に良かったと感じた。特にキャッチした後 3 秒以内にボールを頭上に上げてトスを上げるなどのバレーの攻め方・守り方に関する技術を身に付けようとする授業づくりがなされていたという点が良かった。
- バレーボールは競争型であり競い合いを楽しむ種目である。競い合いを楽しむとは、「勝つための工夫を楽しむ」ことがポイントである。具体的には、「どうやったら勝てるのか?」ということを生徒なりに考えることが大切である。
- 生徒の実態に応じてルールをどう変化させていくかを思考させることは、画期的で生涯スポーツにも活かされると思う。一方で本来は、自分の技能やチームの戦術行動を高めることで勝ちにいくとする姿が大切である。
- 今回の“ルールの工夫”では、自分の未熟な技能をルールで補っていかうとするとも解釈できる。見方を変えると、個人の技能の向上を阻むことに繋がるのではないかと危惧される面もある。だからこそ、1 回投げてトスをするなどの工夫をすることで、個人技能や集団技能にも意識をもちながら授業を進めていかうとするスタンスは大切である。
- 自チームがスパイクを打つ際に、ブロックカバーに入る生徒が数名いた。このような面が本来教えるべき教育内容になってくる。どうやって攻めたら良いか、どうやって守ったらよいかを思考させることが大切である。
- 全員が触ってから返すというのは正規のルールに逆行する形になっている。バレーボールという素材をそのまま与えると難しいため、素材を改変して教材化していくことが必要になってくる。学習の流れとしては、技能の高まりに応じて正規のルールに近づけていくことが必要であり、最終的にはスポーツ文化としてのバレーボールを楽しむことを目指すべきである。
- 今回の授業クラスに関しては、技能の差は多少あるものの大きな差ではなかった。その中で、“共生”について考える必要性があったのかが気になった。共生の視点は、生徒の切実感から生まれてきたものを拾い上げて授業に取り入れることが大切である。
- 共生の視点の根本にあるものは、違いを認めるということなので、態度面に走ってしまいがちである。(例: 相手をけなさない等)そこを、作戦や戦術といった体育ならではの技術的な教育内容と絡めて指導できると良かった。

(2) 宮崎県教育庁スポーツ振興課 外薗 武志 指導主事

- “全員触って相手コートに返す”というオリジナルルールを考案したチームは、楽しそうに活動できていたのは大変良かったが、今後どのようにルールを改変していくのかを見てみたい。
- 最終的には正規ルールでゲームを楽しめるようになることがゴールであると思うので、技能が高まってきた段階で正規ルールにしていく方が良い。
- 授業者の目指す姿にもっていくための仕掛けや問いを入れていくことが大切である。今回のオリジナルルールに関しても目指すところにもっていくための声掛けが出てくるとさらに良かった。